埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

An exploratory study on cognition and values of two types of narcissism.

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-07-26
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 遠田, 諭
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/593

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

２つの型の自己愛の認知および価値観に関する探索的研究

An exploratory study on cognition and values of two types of narcissism.

遠　田　　諭
ONDA, Satoshi

自己愛に関しては近年、実証的研究および臨床の視点においても、過敏型と誇大型という２つの自己愛の型があるという観点で研究が行われている。本研究では、認知行動療法的視点から自己愛の問題への援助方法を検討するにあたり、自己効力感および文章完成法によって探索的に２つの自己愛の型の特徴を把握することを目的とし、115名の大学生を対象に調査を行った。その結果、自己効力感尺度においては、過敏型の不適応性と誇大型の社会的適応の高さが示唆された。また、文章完成法の記述の傾向から、過敏型は心に秘めた野心を持ちながらも、それを実現できないところに葛藤が生じる可能性があり、誇大型は自分に被害を与えた人への執着があり、対人関係に葛藤を生じやすい可能性があることが示唆された。

問題と目的

近年の日本においては、自己愛という概念が様々な社会的問題と関連して取り上げられており、鑪(2003)はひきこもりと、大渕(2003)は凶悪犯罪との関連を指摘するなどされている。自己愛に関する問題は、古くから多くの臨床家や研究者によって注目されてきた。臨床家においてはFreud(1914)を筆頭に、Kohut(1971)やKernberg(1984)などが挙げられる。さらに最近では、臨床的な観点からGabbard(1989)などにより、従来の自己愛の概念が誇大性の側面のイメージに偏っているとの指摘がなされ、自己愛性人格障害には一見すると相反するような傾向を持つ２つの型があるという主張から、自己愛を２つの側面から捉えようとする流れが形成されている。研究者によって自己愛の２つの型の呼び方は異なるが、自己愛の研究および臨床実践においては、誇大性を表に表現する自己顕示的なものと、一見すると控えめに見えるが背景には表現されない誇大性や自己顕示性を持っている抑制的なものとに分けて考えることには意見が一致している。例えば、Broucek(1982)は「自己中心型(egotistical narcissist)」と「解離型(dissociative narcissist)」に分け、前者を誇大的で傍若無人な性格のタイプ、後者を引きこもりがちで恥の感覚が強いタイプとした。Rosenfeld(1987)は厚皮(thick skinned)と薄皮(thin skinned)に分け、前者を自己愛的な内的対象関係により外界を能動的に覆い、外界現実をコントロールしようとするタイプ、後者を自己愛的な内的対象関係を保護しようと外界を避け、引きこもるタイプとしている。

キーワード：過敏型自己愛、誇大型自己愛、自己効力感、文章完成法
Key words ：Hypervigilant Narcissism, Grandiose Narcissism, Self-efficacy, Sentence Completion Test

特に日本の臨床場面では、福井(1998)は誇大感はあまり目立たず、自己評価の低さや抑うつ感、引きこもりなどを呈する人が多いことを指摘しており、両者を分けて援助方針を立てる必要があると考えられる。また、一般に青年期は自己愛が高まりやすい時期と言われており（大渕，2003など)、援助を求めて相談に来る青年の中には自己愛性人格障害の診断はつかないが自己愛の問題を抱えているケースも多いと考えられる。本研究においては、自己愛に関する問題は人格障害固有のものではなく、自己愛を一般青年にも共通して存在する特性の一つとして考える。

これまで、自己愛に関しての議論は精神分析的視点からなされることが多く、認知行動療法的視点からの議論は少ない。福井(1998)の指摘する自己評価の低さは認知面の問題であり、ひきこもりという状態にも認知面の問題が絡んでおり、行動上の障害が生じていることが想定できる。自己愛の問題を抱えている場合、２つの型によって傍若無人さやひきこもりのようにその現れ方は異なるものの、対人関係を中心に社会的不適応を起こす可能性があり、その背景には認知面の問題があることが考えられる。社会の中で適応的に生活していくためには、日常の様々な課題に対してうまくやっていけるという感覚がなくてはならない。Bandula(1977)はそれをセルフ・エフィカシー（自己効力感）として提唱している。Bandula(1977)はセルフ･エフィカシーが行動遂行に影響を及ぼす水準には２つあり、特定の課題に影響を及ぼすものと、より一般的・長期的な行動に影響を及ぼすものがあるとした。そして、坂野・東條(1986)は、一般性セルフ・エフィカシー尺度を開発し、一般性セルフ・エフィカシーの高低が個人の行動全般にわたって影響する可能性を示唆している。一般性セルフ・エフィカシーが行動に影響を及ぼす認知的側面であれば、２つの自己愛の型の行動的側面の相違の背景には、認知的側面における相違があることが想定される。

Broucek(1982)やRosenfeld(1987)が挙げたように、臨床的に指摘されている自己愛の２つの型の対人関係のとり方には相違があり、その背景には２つの型の価値観の相違が影響を及ぼしていると考えられる。２つの型の価値観の様々な特徴を把握することは、２つの型の自己愛をより深く理解することにつながるだろう。また、その相違を把握するためには、質問紙よりも自由度の高い課題による把握も有効と考える。質問紙への回答では、普段それほど重要と考えていない項目についても、問われればそれを重要として考え、問われた全てが重要度の高いものとなってしまう可能性がある。自由度の高い課題に対しては、自分にとって重要度の高いものを反応しやすいのではないだろうか。

そこで本研究では、誇大性を表に表現する自己顕示的な自己愛の型を誇大型、表には表現されないが背景に誇大性や自己顕示性を持っており、他者からの評価を気にする自己愛の型を過敏型として、両者の特性の相違について把握することを目的とする。特に、質問紙だけでは測定しきれない日常的な認知面や価値観について、SCT（文章完成法）を用い、その記述内容の分析から両者の特徴を明らかにしたい。

方法

１．調査時期および対象

2008年４月から2009年１月に関東の私立大学生143名（男性名95、女性48名）を対象に、

講義時間内において集団実施し、回答に不備がなかった115名（男性77名、女性38名）を分析対象とした。なお、SCTは一部の対象者への実施となったため、92名分の分析であり項目によっては未記入のものがあったため項目ごとに分析対象人数が異なる。

２．使用尺度

(1) 自己愛尺度　高橋（1998）によって作成されたものを使用した。これは、“周囲のことを気にする傷つきやすいナルシシズムの因子”14項目と“周囲を気にかけない誇大的なナルシシズムの因子”11項目で構成されており、それぞれの記述について自分がどの程度当てはまるかについて“全く当てはまらない”から“非常に当てはまる”までの５件法にて回答を求めた。本研究では、“周囲のことを気にする傷つきやすいナルシシズムの因子”を過敏特性、“周囲を気にかけない誇大的なナルシシズムの因子”を誇大特性として扱う。

(2) 自己効力感尺度　坂野・東條（1986）によって作成された一般性セルフ・エフィカシー尺度を使用した。「行動の積極性」７項目、「失敗への不安」５項目、「能力の社会的位置づけ」４項目の３下位尺度、計16項目で構成されており、それぞれの記述について自分が当てはまるか否かについて“YES”“NO”の２件法にて回答を求めた。

(3) SCT文章完成法　精研式文章完成法（佐野・槇田，1972）を用いた。SCTは投映法に分類され、刺激文に対しての自己記述方式を取っているため、自分自身が認識できる範囲のものが反映されるために、前意識領域にある日常的な価値観や態度を知ることができると考えられる。また、多くの場合は１項目に１種類の回答となるため、その回答者にとって重要度の高い事柄が反映されやすいと考えられる。

結果と考察

１．対象者の群分け

自己愛尺度および自己効力感尺度の平均値・標準偏差を表１に示す。自己愛尺度の過敏特性と誇大特性それぞれの平均点を境に低群・高群に分け、その組み合わせにより対象者を４群に分けた。過敏特性低・誇大特性低群は自己愛のどちらの側面も低いので、自己愛低群とした。過敏特性高・誇大特性低群は、誇大的な側面は低いが他者からの評価を気にする群であるので、評価懸念群とした。過敏特性低・誇大特性高群は、誇大的な側面は強いが他者からの評価を気にしない群であるので、誇大型群とした。過敏特性高・誇大特性高群は、誇大的な自己愛を持ちながらも他者からの評価を過敏に気にする群であるので、過敏型群とした。各群に分類された人数は、自己愛低群43名、評価懸念群31名、誇大型群18名、過敏型群23名であった。

表１．各尺度の平均値および標準偏差

尺度	平均値	標準偏差
過敏特性	36.78	9.81
誇大特性	21.95	7.45
行動の積極性	2.76	1.97
失敗に対する不安	3.05	1.44
能力の社会的位置づけ	1.72	1.32

２．自己効力感尺度の結果および考察

４群間の自己効力感尺度に関する比較を行うために、下位尺度ごとに分散分析を行った結果、行動の積極性（$F(3,111)=5.21, p<.01$）、

失敗に対する不安(F(3,111)=15.88,p<.01)、能力の社会的位置づけ(F(3,111)=13.14,p<.01)において群の効果が有意であったため、多重比較（Tukey HSD法）を行った（表２）。

行動の積極性では、誇大型群が評価懸念群に対して有意に高く(p<.01)、過敏型群と自己愛低群に対しても高いという有意傾向があった(p<.10)。失敗に対する不安では、過敏型群・評価懸念群が誇大型群・自己愛低群に対してそれぞれ有意に高かった(p<.05)。能力の社会的位置づけでは、誇大型群・過敏型群が評価懸念群・自己愛低群に対して有意に高かった(p<.01)。

過敏型群と誇大型群の相違としては、両群とも同じように自分自身の能力を社会的に高いものと認知しながらも、誇大型群の方がより積極的に行動を起こすことができ、一方で過敏型群は失敗への不安を強く抱えていることが示された。過敏特性と誇大特性を両面を抱えている過敏型群では、高いと認知している能力を積極的に表現することができず、不安のためにその機会を失する可能性があり、そこに葛藤が生まれやすいと考えられる。自己効力感が高いと適切な問題解決行動に積極的になれ、ストレス対処行動を取りやすいと言われており(嶋田，2002)、誇大型群の自己効力感の高さは一定の社会的な適応に結びつくものだと言える。また、Bandula(1977)によれば、自己効力感が高いと葛藤状況で長期的に耐えることができるとされている。この点では、誇大型群の方が過敏型群よりも葛藤状況に耐えられることになる。しかし、葛藤を認識した上で耐えるのと、葛藤が存在することを認識せずにいるのとでは、その後の適応に違いがあると考えられ、誇大型群がどちらであるのかは不明であり、誇大型群の自己効力感から予想される社会的な適応の度合いについては今後さらなる検討が必要であろう。

表２．自己効力感尺度の多重比較

従属変数			平均値の差	標準誤差
行動の積極性	自己愛低群	誇大型群	-1.274＋	.524
		評価懸念群	.902	.440
		過敏型群	.185	.482
	誇大型群	評価懸念群	2.176**	.553
		過敏型群	1.459＋	.587
	評価懸念群	過敏型群	-.717	.514
失敗に対する不安	自己愛低群	誇大型群	-.323	.344
		評価懸念群	-1.800**	.288
		過敏型群	-1.420**	.316
	誇大型群	評価懸念群	-1.477**	.363
		過敏型群	-1.097*	.385
	評価懸念群	過敏型群	.380	.337
能力の社会的位置づけ	自己愛低群	誇大型群	-1.280**	.323
		評価懸念群	.474	.271
		過敏型群	-1.036**	.297
	誇大型群	評価懸念群	1.754**	.341
		過敏型群	.244	.362
	評価懸念群	過敏型群	-1.511**	.317

(**p<.01,*p<.05,+p<.10)

３．SCTの結果および考察

今回は、SCT60項目のうち各群の傾向が比較的顕著であった８項目について各群の傾向の分析を行う。SCTの分析はKJ法にならい、各項目ごとに全回答をいくつかの分類枠組にまとめていき、その後各群ごとに分けて分類枠組みへの割合を算出した（表４および表５）。傾向の分析にあたっては、過敏型群と誇大型群の比較を中心に行う。

(1) １項目あたりの平均文字数の比較

各回答者の１項目あたりの平均文字数を比較するために分散分析を行った結果、群間の平均文字数に差があるという有意傾向($F(3,84)=2.618, p<.10$)が認められたため、多重比較を行った（表３）。その結果、誇大型群が過敏型群に比べて１項目あたりの平均文字数が多いという有意傾向が認められた($p<.10$)。これは、誇大型群のエネルギーの高さや自己顕示性の現われとも考えられるし、評価懸念が低いために自分の考えを率直に表現しやすいことも関連しているのではないかと考えられる。自己開示できるというのは自信の表れとも言え、過敏型群は防衛的であると言えよう。

(2)「私がきらいなのは」への回答傾向の比較

“人”（特定の人や特定の要素を持った人など)、“物”（食べ物･虫など)、“事柄･状況”（勉強・努力、特定の場所・状況など)、“その他”に分類された。４群とも“人”への分類割合が最も高いが、誇大型群（59.3%）が他群よりも高い傾向があった。“人”に分類された項目をさらに下位に分類してみると、“常識・倫理”“強制･威圧”“疎外行為”“特定の人物”“その他”に分類された。度数が少ないので明確ではないが、誇大型群では、“強制･威圧”に分類される『上から目線で色々な事を言われる事である』『やけにえらそうにしている人だ。上司であっても、必要以上にえらそうにしてほしくない』といった、自分よりも上位の立場に立たれるのを嫌う傾向があるようである。これは誇大特性に合致する結果であり、年齢や立場によって相手の優位性を感じさせられる他者の言動に不快感を感じやすいと言えるだろう。一方、過敏型群では『のけ者にされる事』『仲間はずれにする行為』といった、集団からの疎外行為を嫌う傾向があるようである。これは、倫理的側面での嫌悪とも考えられるが、過敏特性から考えると自分自身が集団から拒否されることへの不安を反映しているのではないだろうか。誇大型群

表３．１項目あたりの平均文字数の多重比較

従属変数			平均値の差	標準誤差
平均文字数	自己愛低群	誇大型群	-4.060	1.841
		評価懸念群	-.589	2.080
		過敏型群	.755	1.987
	誇大型群	評価懸念群	3.472	2.032
		過敏型群	4.815＋	1.936
	評価懸念群	過敏型群	1.344	2.165

(+p<.10)

はタテの支配関係に敏感であり、過敏型群はヨコの共同関係に敏感であると言い換えられるだろう。

(3)「将来」への回答傾向の比較

“漠然とした願望”（幸せや安定などを求めるもの）、“明確な方向性”（特定の職業や進路の志望が決まっているもの）、“不安”（将来への不安を中心とするもの）、“未定”（方向性が決まっていないもの）、“その他”に分類された。

誇大型群と過敏型群を比較すると、“明確な方向性”の割合が誇大型群（22.0%）の方が過敏型群（10.0%）よりも高い。また、“不安”の割合が過敏型群（20.0%）が誇大型群（14.3%）よりもやや高い。自己効力感尺度において、誇大型群の行動の積極性が高かったことと合わせて考えると、誇大型群は明確な方向性のもとに行動を積極的に起こしていくことができることになる。あるいは、行動を起こし様々な経験をする中で自分の方向性を作っていったとも考えられる。ただし、誇大型群の記述内容としては「教員」「大学院進学」と現実的なものであるが、その内容が実力相応でない場合には挫折や不適応を生じさせる要因ともなりうる。一方、過敏型群は自己効力感尺度においても誇大型群よりも行動への不安が高く、SCTにおいても同様の結果となった。調査を行った時期は「100年に一度の経済危機」とも呼ばれるような不安定な経済状態であり、将来への不安を感じるのは当然のこととも言える。不安は必ずしも不適応に直結するものではなく、堅実さという適応的な側面も有している。また、上記のように明確な方向性を持っていてもそれが実力相応のものであるかは不明である。少なくとも、誇大型群の方が目標に向けて行動を起こしやすく、過敏型群は不安により明確に目標を定めることができず、行動を起こしにくいと考えられる。目標設定およびその達成のための計画の適切さが、特に誇大型群の適応を分けると考えられる。

(4)「私が心をひかれるのは」への回答傾向の比較

“人”（特定の人物・性格など）、“物”（動植物・芸術など）、“場所”（景色・空間など）、“その他”に分類された。誇大型群の“人”に分類された記述においては、『自分が持っていない力や能力がある人が、それを活用している所です』『私が苦手にしていることをあっさりこなしてしまう人』というように、自分との比較で能力が優れている人に心がひかれるという傾向が見られる。一方、過敏型群では『自分が真剣に考えている道で輝いている人です』『スポーツを全力でやっている人です』といった一つのことに打ち込んでいる人や、『芸能人』『舞台の上で演技している人たち』のように華やかで目立つ存在に心がひかれる傾向が見られる。誇大型群・過敏型群のどちらも能力的側面に関係する記述であるが、誇大型群の記述は生得的な能力に近い印象があり、過敏型群の記述は後天的な継続的努力のもとに作られた能力という印象がある。自己効力感尺度において過敏型群は、自分の能力を高いと認識しながらも遂行には大きな不安を抱えており積極的に行動を起こせないことが示されている。自分の能力への信頼感が揺らぎやすいので、一つのことに全力を出し切れず、表舞台に立つことを切望しながらも実現しないことが多いために、それができる人に心ひかれるのではないだろうか。

表４．SCTへの回答分類結果１

	「私がきらいなのは」				
	人	物	事	そのほか	
自己愛低群	10 (41.7)	8 (33.3)	5 (20.8)	1 (4.2)	
誇大型群	16 (59.3)	6 (22.2)	5 (18.5)	0 (0)	
評価懸念群	9 (52.9)	3 (17.6)	4 (23.5)	1 (5.9)	
過敏型群	9 (45.0)	6 (30.0)	4 (20.0)	1 (5.0)	
	「私がきらいなのは」“人”の下位分類				
	常識・倫理	強制・威圧	疎外行為	特定の人物	そのほか
自己愛低群	3 (30.0)	2 (20.0)	0 (0)	4 (40.0)	1 (10.0)
誇大型群	2 (12.5)	4 (25.0)	1 (6.3)	3 (18.7)	6 (37.5)
評価懸念群	2 (20.0)	1 (10.0)	1 (10.0)	0 (0)	6 (60.0)
過敏型群	1 (11.1)	0 (0)	5 (55.6)	0 (0)	3 (33.3)
	「将来」				
	漠然とした願望	明確な方向性	不安	未定	そのほか
自己愛低群	8 (33.3)	4 (16.7)	5 (20.8)	2 (8.3)	5 (20.8)
誇大型群	12 (44.4)	6 (22.2)	4 (14.3)	4 (14.3)	2 (7.1)
評価懸念群	11 (64.7)	4 (23.5)	1 (5.9)	1 (5.9)	0 (0)
過敏型群	10 (50.0)	2 (10.0)	4 (20.0)	3 (15.0)	1 (5.0)
	「私が心をひかれるのは」				
	人	事物	場所	そのほか	
自己愛低群	7 (30.4)	13 (56.5)	3 (13.0)	0 (0)	
誇大型群	12 (48.0)	11 (44.0)	2 (8.0)	0 (0)	
評価懸念群	11 (64.7)	3 (17.6)	3 (17.6)	0 (0)	
過敏型群	6 (30.0)	9 (45.0)	2 (10.0)	3 (15.0)	

	「私の不平は」						
	社会	人	自分	身近な環境	内容不明	ない	そのほか
自己愛低群	2 (8.3)	1 (4.2)	5 (20.8)	0 (0)	5 (20.8)	9 (37.5)	2 (8.3)
誇大型群	6 (24.0)	2 (8.0)	4 (16.0)	2 (8.0)	6 (24.0)	3 (12.0)	2 (8.0)
評価懸念群	2 (11.8)	2 (11.8)	3 (17.6)	1 (5.9)	4 (23.5)	4 (23.5)	1 (5.9)
過敏型群	6 (30.0)	2 (10.0)	2 (10.0)	2 (10.0)	2 (10.0)	5 (25.0)	1 (5.0)

カッコ内は%

(5)「私の不平は」への回答傾向の比較

“社会”（社会・世の中・不特定の人)、“人”(特定の人物)、“環境”(大学･バイトなど)、“自分”（自分の特性)、“内容不明”（「たくさんある」や「言わない」など)、“ない”、“その他”に分類された。誇大型群･過敏型群ともに“社会”の割合が他２群に比べて高かった。記述を見ると、誇大型群では「平等・不公平」というキーワードと「見た目」に左右されがちな人々への不平という趣旨のものが中心であるが、過敏型群では『なぜこの世は腐っている人ばかりなのか』『努力が報われないこと。色々な面で』といった内容が中心であり、傾向がやや異なるようである。誇大型群の記述は社会通念上のものであり、過敏型群の記述内容は自己経験に基づくものである。過敏型群は“自分”の割合も低く（10%)、周囲に帰属させやすい傾向があると考えられる。これまでの経験の中で、自分なりに努力してきたつもりであるが、結果だけでなくその過程を含めたものに対する正当な評価を他者や社会から得られなかったことへの怒りに近いも

のを持っているのではないだろうか。誇大型群は、成功者との比較において、その差異を自己に帰属させるのではなく、出生の時点でその差があると認知しやすい傾向があると考えられる。上記の「私が心ひかれるのは」の記述においても、誇大型群は生得的なものへの傾倒があり、少し踏み込んだ解釈をすれば誇大型群は「チャンスさえ平等にあれば成功できる」と内心では思っているのではないだろうか。一方、過敏型群は学習性無気力に近い様相であり、「何をやっても無駄」と諦めているようでもある。また、過敏型群は「言わない」というような心に秘めておく回答がなかった。このことは、日ごろ感じている不平不満を容易に表出してしまいやすい傾向と言えるかもしれない。自己効力感尺度における不安の高さと積極性の低さから考えると、行動を実行に移したり努力をすることは難しいことが多いと考えられる。他者から見た場合に、過敏型群は自分では何もしないくせに不平不満だけは口にする人物として見られる可能性がある。今回は自己記述式のSCTへの回答であり、どのような回答をするかある程度意識的にコントロールすることができ、社会性という意味ではそれが求められる側面もある。実際の対人関係における表情や態度などはより瞬間的な反応としてのものも多く、不平不満を表出しやすい傾向と結びつくと社会性の側面での不適応を招くことになるだろう。

(6)「私の頭脳は」への回答傾向の比較

“否定的”、“肯定的”、“特定の事柄”（特定の事柄で占められているもの）、“普通・その他”に分類された。誇大型群・過敏型群で“否定的”の割合が高く、特に過敏型群では“肯定的”の割合が低い結果となった。誇大型群の特徴である誇大特性の高さから考えると“肯定的”の割合が高くなると想定できるが、結果は他３群と差はなかった。今回の調査は単独の大学において行ったため、狭い知的水準群における調査だったことがこの結果に関係しているかもしれない。また、スポーツ・芸術・音楽などの能力は“頭脳”という単語からは連想されるものではないと思われるため、この項目だけでは誇大特性による能力の自己認知の高さを把握することはできないであろう。誇大型群・過敏型群ともに“否定的”“肯定的”に回答の７割以上が分類されるというのは、自身の能力を自己評価する項目に対して、良いか悪いかの２分割での判断となりやすい傾向と考えることができる。特に、過敏型群の自己否定的な側面が際立っており、自己評価の低い側面が伺える。この点は、自己の能力や遂行度を連続線上で判断することなく、all-or-nothingで考えてしまう認知的な歪みとも言えるだろう。

(7)「私の野心」への回答傾向の比較

“非現実的内容”“ある”“ない”に分類された。野心について何らかの記述をしているもののうち『世界制服』などを“非現実的内容”に、それ以外のものを“ある”に分類したが、さらに「秘密である」「大きく胸に秘めている」など他人には言わない“秘密”を下位分類として見ると、過敏型群は“ある”の割合も高い（70.0%）が、下位分類の“秘密”も他群よりも高い割合（20.0%）となっている。過敏型群では、誇大傾向により野心を持っているが、過敏傾向によりそれを表現することに抵抗を感じたのであろう。野心の表現に抵抗を感じる理由としては、表現した時点での評価懸念と、それが達成できなかった時の

評価懸念が関係していると思われる。

誇大型群の“ない”の割合が高い（51.9%）のは誇大特性と反する結果である。誇大特性からは、誇大的な野心を記入する割合が多いと予想できるが、結果としてはそれに反する形となった。野心とは理想自己の極みとも言える。誇大特性が高いと、現実自己と理想自己の差を小さく捉える傾向が認められている（遠田，2008）。すなわち誇大型群の現実自己は理想自己と重なるため、野心としての理想自己を持たないのではないだろうか。あるいは、野心とは身分不相応な望みであり、達成の見込みがかなり低いものが野心と言える。誇大型群の望む事柄は達成可能と認識しているために、達成可能性の低い野心としては考えないのかもしれない。

(8)「私が羨ましいのは」への回答傾向の比較

“経済”（金銭的な余裕など）、“特性”（性格、外見など）、“能力”（優れた能力）、“状況”（特定の状況）、“その他”に分類された。DSM-Ⅳの自己愛性人格障害の診断基準に他人への嫉妬に関する項目があり、また、Kernberg（1975）の記述した嫉妬深く貪欲な自己愛者は誇大型に近いと考えられており、「羨ましい」という刺激文は特に誇大型の特徴を把握するための手がかりとなると考えられる。特徴的なのは、誇大型群・過敏型群において“経済”に分類された記述がなく、誇大型群は“特性”の割合が高く（70.8%）、過敏型群は“能力”の割合が高い（40.0%）ことである。“特性”をさらに“内面特性”“身体特性”“対人特性”に下位分類に分けると、誇大型群は『社交性に富んでいる人』『誰にでも普通に話せる人』という記述に代表される“対人特性”の割合がやや高い（41.2%）傾向があった。誇大型群は、対人関係において自分の現状と周囲を比較しやすいようである。“経済”は成功の証として分かりやすいものであり、誇大特性の高さと関連するものであると考えられるが、少なくとも大学生においては対人関係の方が身近な問題のようである。大学生においては収入の格差は比較的少なく、かつ目立ちにくい問題でありあまり気にならないのだろう。一方で、対人関係、特に多くの人と関わっているかどうかという点は、大学生にとっては分かりやすく周囲と比較でき、気になる問題なのであろう。遠田（2008）によると、誇大型群は対人緊張を感じにくいことが示されている。対人緊張を感じにくいのであれば、引っ込み思案になることなく積極的に対人関係に入っていくことができるはずであり、“対人特性”を羨ましく感じないのではないかと思われる。共感性が低く、他者を自分の利益のために利用するという誇大型の一般的な特性ともなじまない。この背景には、誇大特性が高いと「友人が多いことが大学生として優位である」というような非合理的な考え方がある可能性や、誇大特性を前面に出してきたこれまでの対人関係において、人が離れていく経験を多くしている可能性が考えられる。少なくとも、誇大型群は対人関係において何らかの不全感を抱いており、他者との比較によって顕現化しやすいようである。一方、過敏型群は何らかの優れた“能力”を持っていることを羨ましく感じ、自分との比較をしやすいようである。“特性”の下位分類においても“外面的特性”が高く（57.1%）、はっきりと目に見える形での他者との比較をしやすいようである。

(9)「心ひかれる」と「私が羨ましいのは」の相違

どちらも何らかの対象についての反応と言えるが、方向性がやや異なるであろう。心ひかれる対象となるのは、魅力ある一種の憧れの存在であり、対象そのものにはネガティブな感情は持たず、むしろ自分がその対象の近くにいることで、あるいは自分の近くに置いておくことでポジティブな感情を誘発されるものと考えられる。一方、羨ましい対象に対しては、嫉妬などのネガティブな感情が誘発されやすい。その対象は、手に入れたいと願うが手に入らないものであるため、欲求不満を感じたり劣等感を刺激されやすいだろう。対象と自己との心理的な距離感が異なると言える。より心理的に揺さぶられるのは、羨ましいと感じる対象と出会った時であり、羨ましさを感じる対象からは離れたい気持ち（回避欲求）が生じることが推測できる。一方、心ひかれる対象には近づきたい気持ち（接近欲求）が生じるのではないか。

誇大型群にとっては羨ましいのは対人特性であり、心ひかれるのは能力である。過敏型群にとっては能力を羨ましく感じ、努力の継続によって得たものに心をひかれる。誇大型群は他者の対人特性に触れることで心理的に揺さぶられやすく、過敏型群は他者の能力に触れることで揺さぶられやすいと言える。この点は、両群の能力への自己評価の差によるものと考えられる。自己効力感尺度からも、過敏型群は自分の能力は社会的に高いものだと認識しながらも不安を同時に抱えているという不安定さを特徴としている。一方、誇大型群は能力の高さに自信を持って積極的に行動を起こせる。誇大型群の自信が誇大的で現実的でないものだとしても、それは一種の安定性につながるものだと言え、他者の能力に接しても揺れ動くことなく捉えることができるのだろう。過敏型群では、他者の能力に触れることが自己評価の不安定さをさらに増すことにもつながるのではないか。

(10)「私が忘れられないのは」への回答傾向の比較

“肯定的内容”、“否定的内容”、“そのほか”に分類された。『高校時代』など肯定的とも否定的ともとることができない記述は“そのほか”に分類された。“そのほか”への分類が多かったため、傾向は不確かであるが群間の比較をしたい。

大きな傾向としては、自己愛低群と誇大型群“否定的内容”の割合が高く(39.1%,40.7%)、過敏型群の“肯定的内容”が高かった(45.0%)。自己愛低群と誇大型群の“否定的内容”の詳細を見ると、自己愛低群では『骨折をしたこと』『友人に怪我をさせてしまったこと』『家族の死』というような事故・不幸というものが目立った。それに対し、誇大型群では『侮辱を受けた日』『あいつのしたことだ』『周囲の冷たい視線です』というような対人関係にまつわるものが目立った。自分に被害を与えた人物については執念深く覚えているようである。この点には、主観的な認知が絡んでいると思われる。そして、他の群には見られない過敏型群に特有の記述として、『オーストラリアの海だ』『昨日読んだ小説のラストシーンだ』『今年の春に見たキレイな桜だ』という情景に関するものが挙げられる。他の群の“肯定的内容”としては『高校３年間の楽しい思い出だ』『部活の仲間だ』というものが多く、何らかの形で他者との関係性を含んだものと考えられるが、情景には他者が関与し

表5．SCTへの回答分類結果2

	「私の頭脳」				
	否定的内容	肯定的内容	そのほか	特定の事柄	
自己愛低群	12 (50.0)	3 (12.5)	8 (3.3)	1 (4.2)	
誇大型群	18 (66.7)	3 (11.1)	3 (11.1)	3 (11.1)	
評価懸念群	7 (43.8)	1 (6.3)	6 (37.5)	2 (12.5)	
過敏型群	14 (70.0)	0 (0)	3 (15.0)	3 (15.0)	
	「私の野心」				
	非現実的内容	ある	(秘密)	ない	
自己愛低群	3 (13.0)	10 (43.5)	0 (0)	10 (43.5)	
誇大型群	2 (7.4)	11 (40.7)	1 (3.7)	14 (51.4)	
評価懸念群	0 (0)	11 (64.7)	0 (0)	6 (35.3)	
過敏型群	2 (10.0)	14 (70.0)	4 (20.0)	4 (20.0)	
	「私が羨ましいのは」				
	経済	特性	能力	環境	そのほか
自己愛低群	7 (29.2)	9 (27.5)	4 (16.7)	2 (8.3)	2 (8.3)
誇大型群	0 (0)	17 (70.8)	3 (12.5)	1 (4.2)	3 (12.5)
評価懸念群	3 (17.6)	9 (52.9)	1 (5.9)	0 (0)	4 (23.5)
過敏型群	0 (0)	7 (35.0)	8 (40.0)	0 (0)	5 (25.0)
	「私が羨ましいのは」“特性”の下位分類				
	内面的特性	外面的特性	対人的特性		
自己愛低群	6 (66.7)	0 (0)	3 (33.3)		
誇大型群	6 (35.3)	4 (23.5)	7 (41.2)		
評価懸念群	3 (33.3)	3 (33.3)	3 (33.3)		
過敏型群	1 (14.3)	4 (57.1)	2 (28.6)		
	「私が忘れられないのは」				
	肯定的内容	そのほか	否定的内容		
自己愛低群	3 (13.0)	11 (47.8)	9 (39.1)		
誇大型群	10 (37.0)	6 (22.2)	11 (40.7)		
評価懸念群	6 (35.3)	8 (47.1)	3 (17.6)		
過敏型群	9 (45.0)	7 (35.0)	4 (20.0)		

カッコ内は%

ている度合いが低いと言える。その点で考えると、過敏型群は他者の介在しない、より個人的な空想をしやすいといえるかもしれない。

まとめと今後の課題

自己効力感尺度においては、過敏型群の不適応性と誇大型群の社会的適応の高さが示唆された。ただし、あくまでも自己効力感は自己認知であるため、行動面で見た場合に実際に誇大型群が適応的であるかは不明である。SCTにおいては、過敏型群はヨコの関係に敏感であることが示唆された。また、自分の能力に自信を持ちきれずに不安を抱え、実行に移すことが難しい上に、それを諦めてしまっているところもある。しかし、完全に諦めているわけではなく、心に秘めた野心も持っており、そこで葛藤が生じる可能性が示唆された。過敏型自己愛の援助としては、この認知面の不安と行動面の遂行の調整を、結果だけでなくその過程も含めて適切に評価していき、自己認知を修正していくことが有効ではないだろうか。

また、誇大型群はタテの関係性に敏感であることが示唆された。大学生においては、社会的な成功を意味する経済的側面よりもむしろ友人関係の広さに関心が強い。また対人関係上、自分に被害を与えた人への執着があるため、対人関係に葛藤を生じやすい可能性がある。そして、自分の持っていない生得的なものに近い能力に心ひかれ、“野心”と呼ぶべきものは持たないが、将来の方向性は見出している。誇大型自己愛の援助としては、能力の高さへの自己信頼感を保ちつつ、行動をより適応的なものとしていくための認知の修正が有効ではないだろうか。

今回、SCTによる探索的な価値観の把握を目的としたが、いくつかの傾向は認められたものの厳密な統計的分析によるものではなく、さらにはその背景に想定される認知的特徴までは明らかにできなかった。また、社会的適応についても不明な点が多く、今後の課題となるところである。

引用文献

Bandula, A. 1977 Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.

Broucek, F. 1982 Shame and its relationship to early naricissistic developments. *International Journal of Pshychoanalysis*, 63, 369-378.

Freud, S. 1914 On Narcissism. An Introduction, SE 14, 73-102. 懸田克躬・高橋義孝訳 1969 ナルシシズム入門 フロイト著作集第５巻 人文書院

福井 敏 1998 誇大的な自己－自己愛性障害 こころの科学，82，291-300.

Gabbard, G.O. 1989 Two subtypes of narcissistic personality disorder. *Bull Menninger Clin*, 53, 527-532.

Kernberg, O.F. 1984 *Serve Personality Disorders: Psychotherapeutic Strategies*. Yale University Press. 西園昌久監訳 1996 重症パーソナリティ障害 岩崎学術出版社

Kohut, H. 1971 *The Analysis of the Self*. New York, International Universities Press. 水野信義・笠原嘉監訳 1994 自己の分析 みすず書房

遠田 諭 2008 青年期における２つの型の自己愛の恥および理想自己・義務自己との一致度について 立教大学臨床心理学研究，２，13-20.

大渕憲一 2003 満たされない自己愛 －現代人の心理と葛藤－ 筑摩書房

Rosenfeld, H 1987 *Impasse and Interpretation*. London, Tavistock Peblications.

坂野雄二・東條光彦 1986 一般性セルフ・エフィカシー尺度の試み 行動療法研究，12(1)，73-82.

嶋田洋徳 2002 セルフ・エフィカシーの評価 坂野雄二･前田基成(編著) セルフ･エフィカシーの臨床心理学 北大路書房 pp.47-57.

高橋智子 1998 青年のナルシシズムに関する研究 －ナルシシズムの２つの側面を測定する尺度の作成－ 日本教育心理学会第40回総会発表論文集，147.

鑪幹八郎 2003 心理臨床と精神分析 ナカニシヤ出版